

意味分析の対象と方法

児 玉 徳 美

1. はじめに

言語が形式と意味の結合したものであるだけに、意味を抜きにして言語を論じることにはできない。しかしその意味が何を表すかについては必ずしも明確な答えはない。

それにはいくつかの理由がある。第1に、言語に限らず、記号は本来あいまい性を含んでおり、そのあいまいさを有するために記号としての機能をはたしている。例えば神が存在するか否かを議論する場合、「神」の内容は10人10色かもしれない。10人で議論する場合、個人ごとに「神」の違いに応じて1から10の符号をつけて議論しようとしても、そのような議論を可能にする能力は人間にはない。第2に、語句の意味のあいまいさは文言で規定する際生じるが、現実に言語を使用する際必ずしも常に生じるものではない。例えば「歩く」と「走る」の区別、「すべて」「ない」「私」などを文言で規定しようとするれば困難が生じるが、日常の言語使用でそれほどの不便が生じるわけではない。第3に、どのような形式と結合した意味を扱うかによって意味の内容も違って来る。例えば形態素・語から文・談話に至る言語表現の何を対象とするかによって意味そのものや意味分析の道具立ても違って来る。

本論は§2から§4において20世紀に入って以後の意味分析を考察する。まず§2で論理学と言語学の異同を考察し、§3、§4で言内外の意味を扱う従来の意味論と語用論の分析法を検討する。問題は従来の分析が言語に存在する意味を十分に記述・説明しているかどうかである。言語活動全体を視野に入れた場合、従来の言語分析は言語に存在する意味の一部を記述・説明しているにすぎない。その限界を克服するために分析対象を拡大し、談話全体や言説をも扱おうとした場合、当然新しい分析法を導入することが必要になる。現在明示的な分析法が用意されているのではなく、新しい分析法を見出そうとしている段階である。最後の§5では分析対象を拡大した場合、どのような意味をどのように記述・説明すべきか、その方向を探る。

2. 論理学と言語学

2.1. 言語への接近法

言語は連続体をなす世界を不連続の範疇に区分し、無限に広がる世界を有限の記号で記述している。当然のことながら言語表現とそれによって記述される世界の間には1対1の関係は存在しない。論理学と言語学は言語表現と世界の間にある「すき間」を埋め、両者の間にできるだけ正確な対応関係を探り、相互に影響を与えながら多くの分野で成果をあげてきた。例えば主語と述語の区分、内包と外延や断言と前提の区別を含む意味の意味、項構造、数量詞の作用域、法助動詞を含むモダリティ、アスペクトなどである。

論理学と言語学はともに言語表現と現実世界との関係を問うとはいえ、その目的が異なる。論理学が言語表現の前提 (premise) から可能世界の結論がどのように導かれるかの推論過程を明らかにするのに対して、言語学は言語表現そのものの形式と意味、およびその結合関係を対象にする。論理学は妥当な推論を求めるために厳密な意味をもつ論理語を用いるのに対して、言語学はあいまいな意味をもつ自然言語の実体を対象とする。その結果、論理学の意味と自然言語の意味は必ずしも一致しないことになる。

(1) a. They got married and had a baby.

b. They had a baby and got married.

(1 a,b) は論理学で $p \ \& \ q$, $q \ \& \ p$ と記述され、同値とみなされる。論理学の & は単に付加を表すだけで p と q の順序は意味に関係しない。ちょうど $2 + 3$ $3 + 2$ でのプラス記号[+]に対応する。これに対して自然言語では通例 (1 a) が結婚後に子どもをもうけたのに対し (1 b) は結婚前に子どもができています。

また論理学では人工言語・自然言語を問わず言語による正確な推論過程を記述するために言語表現が真か偽かが常に重要な問題になるが、論理的真が必ずしも現実の真ではない。特に命題と命題の関係を扱う命題論理は各命題および命題の結合したものが真か偽かということのみを扱い、その命題の内容を問題としないため、論理的真は自然言語においては不自然にみえることもある。

(2) a. Two times two is four and John woke up at seven.

b. Two times two is four or John woke up at seven.

c. If two times two is four, then John woke up at seven.

(3) a. $p \ \& \ q$

b. $p \ \vee \ q$

c. $p \ \supset \ q$

命題論理で (2 a-c) はそれぞれ (3 a-c) のように形式化される。そのうち (a) は p , q の両方が真の場合, (b) は p または q のいずれかあるいは両方が真の場合, (c) は p が真で q が偽以外の場合、真となる。もし p , q が真であるとすれば (3 a-c) の命題はすべて真で何の問題もない。ところが (2 a-c) の自然言語は命題論理と違っていずれも通例不適格で実際に用いられることはない。自然言語の and, or や if...then は因果関係など何らかの意味で関連している命題を結合するが, (2 a-c) にはそのような関連がみられないためである。

命題論理は命題の内容を問題としないため、自然言語の意味を直接問うことはできない。他方、述語論理は命題論理を基礎に命題の内容をも問題にしている。つまり命題の内容が真であるために世界はどのようなものでなければならないかを問うており、自然言語の文が述語とその述語が満たされるべき項との関係を扱う言語学の意味論と多くの共通点をもっている。命題論理と述語論理に違いはあるが、論理学は命題が真であるための可能世界がどのようなものであるかについて適用範囲を指定しており、言語学の意味論に分析の基礎を提供しているともいえる。

(4) a. It is Monday and we are studying linguistics.

b. I lost my keys or I forgot to take them with me.

(5) a. *Mary is happy and is not happy.

b. Mary is happy or is not happy.

- (6) (前提 1) All men are mortal.
 (前提 2) Socrates is a man.
 (結論) Therefore Socrates is mortal.

- (7) x (Man (x) Mortal (x))
Man (a)
 Mortal (a)

(4 a) は命題論理において p と q が真の場合にのみ真となる。自然言語においても同様である。この日が Tuesday であったり, linguistics が phonetics である場合, (4 a) は虚偽の文となる。(4 b) は論理学においても自然言語においても p が q のいずれかが生じていれば真となる。ただし論理学の真理値表では p と q の両方が偽の場合, $p \wedge q$ は偽となる。自然言語でも「鍵をなくした」のでもなく「持ってくるのを忘れた」のでもなく, 鍵は他人のもので元々鍵を持っていなかったとすれば, 2 つの節はいずれも偽で (4 b) 全体も偽ということになる。自然言語として通例 (5 a) は不適格であり, (5 b) は適格とされるが, これも命題論理の原則につながる。命題論理において (5 a) は「A が B であるとき, 同時に B でないモノではありえない」($p \wedge \text{not } p$) という矛盾律に違反して偽であるが, (5 b) は「A は B であるか B でないかのどちらかであり, B でもなく, B でないモノでもないという中間的なモノはありえない」($p \vee \text{not } p$) という排中律に従って真である。(6) はいわゆる三段論法であり, (7) はそれを述語論理の用語で示したものである。一番上の行は「すべての x についてそれが Man という性質をもっていれば, それは必ず Mortal という性質をもつ」, 2 行目は「Socrates という固体は Man という性質をもつ」, 一番下の行は「Socrates は必然的に Mortal という性質をもつ」ことを表す。自然言語はあいまいであるとしばしばいわれるが, コミュニケーションの道具としてあまり混乱を起こさないのも, 一部には人間の思考が直接・間接的に & , , , , x などの論理語に依拠しているためである。

2.2. 意味 (sense) と指示 (reference) と真理値 (truth-value)

述語論理が命題の内部構造を問題にするとはいえ, そこで扱われる意味は言語の明示の意味 (denotation) であり (つまり示唆の意味 (connotation) ではなく), 指示対象 (referent) が同一であるか否かが重要な意義をもつ。

- (8) a. John is a politician and he is honest.
 b. John is a politician but he is honest.
- (9) a. *This triangle is round.
 (*この3角形は円い)
 b. John is neither alive nor dead.
 (ジョンは生きても死んでもいない)
 c. John is a bulldozer.
 (ジョンはこわもてで脅してくる)
 d. *The table was laughing.
 (*テーブルが笑っていた)
- (10) a. *The ancients believed that the Morning Star is the Evening Star.
 b. The ancients believed that the Morning Star is the Morning Star.

論理学において(8 a,b)は同じ世界を表し、真偽の違いはない。しかし言語学では(8 a,b)に意味の違いを認め、(8 b)は「政治家でかつ正直であること」が両立しにくいことを示唆している。(9 a-d)はすべて論理的に偽とみなされる。より正確には(9 a,b)は主語と述語が性質上矛盾して偽、(9 c,d)は主語と述語が概念範疇上偽(sortally or categorially false)であり無意味な命題とされる。しかし意味論では(9 a)のaliveやdeadは程度語と解釈され、(9 c)のbulldozerは隠喩として「威嚇する者」と解釈されて適格になる。(9 b,c)では意味がなぜ拡張し、(9 a,d)ではなぜ拡張しないのかという問題があるが、(9 a-d)の(不)適格性の違いは今日の意味論では比喩に基づく選択制限の違いとみなされている。(10)において同じ金星(Venus)が位置を変えて現れ、「明けの明星」が「宵の明星」であることを知らなかった古代人にとって(10a)は偽で不適格な文となる。

かつてFrege(1989)は多義性の問題を解決しようとして内包ともいえる意味(sense)と外延である指示対象(referent)を指す指示機能(reference)を区別した。彼によると、「明けの明星」と「宵の明星」は指示機能は同じであるが、意味(sense)が異なる。意味(meaning)におけるこの区別は現代意味論の先駆けであり、その後、論理学や意味論において同義性とは何か、意味とは何かが問われ、真理値として3値を認めるべきか否か、断言(assertion)のほかに前提(presupposition)を認めるべきか否かの対立にもつながっていった。

(11) a. The king of France is bald.

b. There is a king of France.

伝統的な論理学では命題が世界との関係で真か偽のいずれかの真理値を与えればよいと考えた。ここでは(11a)の世界は(11b)の世界を含意(entail)しており、(11a,b)は同じ資格で世界を断言(assert)している。その結果、現在のようにフランスに国王がいない場合、(11b)が偽であるため(11a)も偽となる。これに対してStrawson(1950)は、(11a)は(11b)を前提(presupposition)に発せられているとみてはじめて(11a)の真偽を論じることができるとした。つまり現実世界において(11a)が真であるためには(11b)が真であることが必要条件であり、(11b)が偽の場合(11a)は真理値に欠けるにしても何も陳述していないわけではない。伝統的な論理学が2値論理を主張するのに対して、Strawsonは真偽のほかに真でも偽でもない命題を認める3値論理を主張した。この対立は前提を認めるか否かを含めて論理学や意味論において今日まで続いている(3値論理、断言と前提、含意関係と前提について詳しくは児玉2001参照)。

真か偽かを問題にする場合、この世に存在するすべての事物や抽象的概念が場所・時間を超えてあらゆる世界で真か偽であるとは限らない。時間の経過とともに場所や性質を変える多面性を持ち、また視点を変えることで同じものが真にも偽にもみえるものが多い。その解決は論理学においても意味論においても求められる。

(12) a. Donald Duck is a duck.

b. Donald Duck is a human being.

c. Donald Duck is neither a duck nor a human being.

d. Donald Duck is both a duck and a human being.

e. Donald Duck is a duck and he isn't.

(13) a. Donald Duck is neither a duck nor a human being in all respects.

b. Donald Duck doesn't behave like a duck and doesn't look like a human being.

c. Donald Duck is a duck in certain respects and a human being in others.

d. Donald Duck looks like a duck but behaves like a human being.

(12)(13)はLöbner(2002:56-9)による。Disneyのアニメに登場するドナルド・ダックはアヒルに似た顔や体形をしているが、羽根の代わりに腕を持ち、人間のように話したり考えたりする。ドナルド・ダックはその名前や顔かたちからアヒルと認めれば(12a)は真となるが、人間のようなふるまいから(12b)ともいえる。そのどちらにも疑問があるとみれば(12c-e)ともいえそうである。しかし論理学では(12c)は排中律に違反し、(12d)は同一律に、(12e)は矛盾律に違反し、いずれも偽となる。(13a-d)では(12a-e)にみられる疑問や矛盾も解消されている。記述にまちがいがいがないからといって、(13a-d)がドナルド・ダックのイメージを明確にしているわけでもない。言語が世界を描写するというものの、ここには言語表現の限界があるのかもしれない。

2.3. 論理学と意味論の違い

論理学と意味論の分析をこれまで考察してきたが、両者の違いは論理学があいまいさを許さない形で論理規則を適用するため限られた論理語を用いて限られた言語現象を対象とするのに対して、意味論は建て前としてあらゆる言語表現を対象にすることに由来している。ここでは3点に絞り、その違いをまとめる。

第1に、論理学に翻訳されている接続詞(&, ,)や量化子()は自然言語のごく一部にすぎない(用例(8)参照)。

- (14) a. Dogs bark.
 b. The dog barks.
 c. All dogs bark.
 d. The dogs bark.
 e. All the dogs bark.
 f. A dog barks.

(15) $x(\text{Dog}(x) \rightarrow \text{Bark}(x))$

意味論において(14a-f)の主語は「総称的」と呼ばれているが、(述語)論理ではその内部構造を区別することができず、すべて(15)のように表示される(詳しくはAllwood et al 1977:169参照)。また論理学が対象とするのは平叙文のみであり、疑問文や命令文は真偽の対象にならない。平叙文でも命題に対する主語や話し手の態度を示すものは真か偽かを判断できず、分析対象とされない。

- (16) a. Mary believes that John is a liar.
 b. Mary regrets that John is a liar.

- (17) a. 未婚で性的関係をもつことは不道德である。
 b. J.F.ケネディは偉大な大統領であった。

(16a,b)はthat節に対するMaryの態度を表し、(17a,b)は話し手の道徳観や価値観を表している。

第2に、自然言語の主要な統語範疇である名詞・形容詞・動詞は述語論理では述語として一括され、その区別が守られていない(用例(7)(15)参照)。用例(14a-f)が一括されることからもうかがえるように、論理学は自然言語にみられる意味と形式のマッピングを対象としていないため、言語表現の分析としては極めて不十分である。

第3に、論理的同値(logical equivalence)と意味論的同義(semantic synonymy)は、用例(1 a,b)でもみたように必ずしも同じものではない。

- (18) a. The bike is next to the building.
 b. *The building is next to the bike.
- (19) a. John broke the window. vs The window was broken by John.
 b. They built the house. vs *The house was built.
- (20) a. The bottle is half empty. The bottle is half full.
 b. Today is Monday. Yesterday was Sunday.
 c. Everyone will lose. No one will win.

(18a,b) は論理的同値であるが、自然言語として(18b) は不適格である。これは論理学が現実世界の指示対象や真理値が同じならば、意味も同じと考えるのに対して、意味論は人間の認知のあり方も考慮しているためである。「上り坂」も「下り坂」も同じ空間を指す限りでは論理的同値であるが、視点の違いを考慮すると意味論的同義にはならない。(19a) の対の文は初期の生成文法では論理的同値に対応する形で知的意味 (cognitive meaning) が等しいと考えられたが、(19b) からうかがえるように、能動文と受動文はそれが生じる文脈が異なり、機械的に言い換えられるわけでもない。今日の意味論では両者の同義性よりむしろその違いが注目されている。(20a-c) はそれぞれ一方が真で他方が偽である状況を考えにくく、Löbner (2002:67) は論理的同値とみなしているが、Allwood et al (1977:171) は(20a) の対の文は明らかに意味が異なり、このような文を論理的同値とみなすことについては意見が分かれるという。意味論は(20a-c) の対がそれぞれ記述的意味を異にするとみなし同義性として捉えない。(20a) では認知上の違いが強調され、(20b,c) では両者の共通点が論じられることはほとんどない。

自然言語を扱う意味論が論理学の基礎概念や明示的分析から多くの示唆を得ていることは明らかであるが、論理学が自然言語を扱うのに限界をもつことも明らかである。今日、論理学や意味論において真偽の捉え方や何を等価とみるかが確定しているわけではない。自然言語をより正確に把握するためには、しよせん論理学は無縁のものであるのか、それとも論理学と意味論は理論をさらに拡張して統合すべきであるのか、あるいは従来の枠組みや分析法と異なる第3の理論を求めるべきであるのか、判断は将来に残されている。

3. 意味論

3.1. 20世紀の潮流：統語分析から語彙分解・マッピングへ

Saussure (1916) 後、言語学は言語構造における各单位間の相互依存関係を明らかにしてきた。つまり対立・差異に基づき、各单位が線条的につながる結合関係と潜在的に交換可能な選択関係を明らかにすることを研究の重要な目標としてきた。この目標はその後の Bloomfield (1933) や Chomsky (1957) に引き継がれている。その結果、素性 (feature) ・音素・形態素・語・句・節・文へとつながる構成素関係、選択制限などの共起制約、文と文の関係など、言語構造の形式面で大きな成果を収めた。しかし意味の分析にはあまり大きな進展はみられなかった。

意味分析に新しい展開をもたらしたのは、20世紀後半になって盛んになった語彙分解 (lexical decomposition) とマッピング (mapping) である。前者は意味元素と呼べる少数の意味素性に語を分解するものであり、後者はある領域の要素が他の領域に写像されたり転写され、異なる領域にあ

る要素間の対応関係を明らかにするものである。

まず語彙分解からみてみよう。音声特徴を表す弁別的素性 (distinctive feature) に対応するものとして意味素性 (semantic feature) が1960年代に導入され、その確立が語彙分解を可能にした。意味素性を利用することにより語彙の意味上の一般化だけでなく、動詞を基礎にした文の意味構造の異同が明らかになった。

語彙分解は1970年前後に展開された生成意味論 (generative semantics) に始まる。そこでは例えば kill (x, y) は x CAUSE (BECOME (NOT (y ALIVE))) と分解された。同じような分解はモンタギュー文法の枠組みに基づく Dowty (1979) などにもみられる。

次例は Jackendoff (1990:45) による。

(21) a. 統語構造

$[_s [_{NP} \text{John}] [_{VP} \text{ran} [_{pp} \text{into} [_{NP} \text{the room}]]]]$

b. 概念構造

$[_{Event} \text{GO} ([_{Thing} \text{JOHN}], [_{Path} \text{TO} ([_{Place} \text{IN} ([_{Thing} \text{ROOM}])])])]$

Jackendoff は主要部の語彙概念構造が項 (argument) や修飾語とどのように結合して句概念構造を形成するかを明らかにしようとしている。(21a) の文は概念構造 (21b) の事象 (Event) に対応する。動詞は事象関数 (Event-function) の GO に対応し、そのため文が移動を表すことになる。文の主語は GO の第 1 項、前置詞句は第 2 項と対応する。第 2 項はそれ自体複合的で経路関数の TO が場所を項として取り、場所はさらに場所関数の IN と事物項に分解されて前置詞の目的語となる。

Jackendoff (1990:53) はさらに例えば drink の語彙項目エントリーを次のように示している。

(22)
$$\left[\begin{array}{l} \text{drink} \\ v \\ \text{---} \langle \text{NP}_j \rangle \\ [_{Event} \text{CAUSE} ([_{Thing}]_i, [_{Event} \text{GO} ([_{Thing} \text{LIQUID}], \\ [_{Path} \text{TO} ([_{Place} \text{IN} ([_{Thing} \text{MOUTH OF} ([_{Thing}]_i)])])])]) \end{array} \right]$$

(22) の概念構造は指標の i, j から、動詞 drink の意味は「 i (主語) が j (目的語となる液体) を i の口の中に入れる」であるとわかる。ここでは選択制限を示すためにも drink の意味が概念範疇 (Event, Thing, Path) と各種の関数 (CAUSE, GO, LIQUID など) に分解されている。

語彙分解の方法は必ずしも統一されているわけではない。次例は動詞がアスペクトを基準に語彙分解されている。

(23) a. (Activity) [x ACT \langle MANNER \rangle (y)]

b. (State) [x \langle STATE \rangle y]

c. (Achievement) [BECOME [x \langle STATE \rangle]]

d. (Accomplishment) [[x ACT \langle MANNER \rangle (y)] CAUSE [BECOME (y \langle STATE \rangle)]]]

e. (Accomplishment) [[x ACT \langle MANNER \rangle (y)] CAUSE [BECOME [z \langle PLACE \rangle]]]

(24) a. John swept. / John swept the floor.

b. John belongs to the club.

c. The train arrived.

d. John swept the room clean. /John broke the dishes. /The dishes broke. /*John broke.

e. John swept the crumbs off the table. /John ran to the store.

(23) は Rappaport-Levin (1998) による意味鑄型であり, (a) は行為動詞, (b) は状態動詞, (c) は終結点を表す到達動詞, (d, e) は行為と終結点を表す達成動詞であり, (24) はその用例である。sweep のような表面接触動詞は単一の事象構造をもち, (24a) のように y (目的語) が随意的であるが, (24d) の break のような外的要因による状態変化動詞は複合事象構造をもち, x (CAUSER) が現れる場合は y が必須で, x が現れない場合のみ y が自動詞の主語になりうる。(23) の意味鑄型を基礎に事象構造がどのように異なるかを明らかにし, さらには項の実現の仕方或多義性拡大についての条件を規定している。

語彙分解は動詞を中心に進められている。その分析は多様な語彙項目が少数の意味元素に還元されることを示し, 語彙項目や文構造にみられる多様な統語上のふるまいが意味上の特質と密接に関連していることを明示的に教えてくれる。

次にマッピングについて振り返ってみよう。特定の領域の要素が他の領域にどのように写像転用されるかは諸言語によって異なる。このマッピングの違いにより諸言語の語彙化や構造上の違いも生まれてくる。さらにやっかいなことに, 異なる領域の要素間の対応関係は 1 対 1 というより 1 対多の形, つまり部分的な対応関係になる場合が多い。意味素性の確立は語彙分解ほど直接的ではないが, 異なる領域に属する要素間の部分的な対応関係を表すためにも貢献している。

言語の関与する領域が多様なだけに, マッピングの対象となる分野も多様に分かれている。

(25) a. 意味と形式

b. 概念と意味

c. 空間・運動の概念化と他領域への写像転用

d. 言語表現と世界

e. 言語と思考・文化

上記のうち, 初期の生成文法では統語論の自立性が強調され, (25a) の意味と形式のマッピングはあまり考慮されなかったが, 今日の意味論では例えば (21) - (24) の語彙分解にとって意味と形式をどのように対応させるかが主要な目標である。ここで導入される意味元素が心理的実在性をもつか否かを明らかにするためには, 言語化される前の概念と言語化された意味との関係 (25b) も問われてくる。言語理論としては生成文法のように言語能力のモジュール性を強調するものもあるが, 認知意味論は (25b-d) において言語能力と認知能力一般との共通面を探っている。そのため認知意味論が例えば言語表現と世界とのマッピングというときは, 人間が世界をどう捉え, その認知の仕方が言語表現にどのように反映しているかが重要な関心事であり, 論理学における言語表現と世界のマッピングとは大きく異なる。(25e) の言語と思考・文化のマッピングは従来の論理学や言語学ではほとんど扱われていない分野である。

人が日常生活で活動する際, 人は自分のもてるすべての知識を駆使しているわけでもなく, 自分を取り巻く周囲のあらゆる状況に神経を集中しているわけでもない。活動全体の目標に関連する要素と無関係な要素を前もって区別し, 前者の要素のみに注目する。活動全体の目標を達成するために有機的なつながりをもつ要素がフレームを形成する。例えば商取引は, Fillmore-Atkins (1992) が示したように, 金銭の授受・商品所有権の移動を伴うことから, 売り手・買い手・商品・お金・価格・契約などの要素がフレームを構成する。このフレームが言語表現にも反映する。

(26) He sold his car and bought a horse with the money.

(27) John is proud of his car. The body is red and the seats are black.

(28) a. John began (reading) the book. vs ?John began the dictionary. vs ??John began the rock.

b. John took a train from Paris to Istanbul. He has family there.

(ジョンはパリからイスタンブール行きの列車に乗った。そこに家族がいる)

vs ?John took a train from Paris to Istanbul. He likes spinach.---Kehrer (2002)

(?ジョンはパリからイスタンブール行きの列車に乗った。ホウレンソウが好きだ)

(26) の下線部は初出の名詞でありながらも定冠詞がついている。これは下線部が商取引を構成する要素であるのであたかも旧情報のように扱われているためである。(27) は最初の文から商取引でなく車のフレームが形成され,(26) と同じように下線部が初出ながら旧情報のように扱われている。(28a) はデフォルト解釈である。最初の文ではreadingが欠如しても、現実世界を反映したbookのフレームからreadingがある場合と同じように解釈される。しかし後の2文では現実世界の典型的な出来事として日常語を用いて動詞と目的語を結びつけるフレームが形成しにくいいため言語表現として不自然である。(28b) のように文と文のつながりにもデフォルト解釈が働いている。最初の例ではジョンが家族に会うためにイスタンブールに向かっていると解釈されるが、後の文では2つの出来事が現実世界の経験と結びつかないため不自然になる。語や文の結合においてどこまでが欠如可能であるか、その境界を解明することも今後の課題である。

(25a,b) のマッピングを通してはじめて記号としての言語表現を正確に理解し,(25c,d) を通して意味の拡がりやさらには人間の多様な能力に接近できる。(25e) の言語と思考・文化は1対1の写像転用や対応関係ではなく、ゆるやかな関連であり、その関係は(25a-d) を明らかにすることにより実態により接近することが可能になる。

3.2. その限界

語彙分解とマッピングが意味を軸に展開した言語分析は形式を重視した構造主義の行き詰まりを打開するものであった。しかしこの意味分析にも限界がある。

第1は文を最大の分析単位とする統語論の影響から脱出できなかったことである。語彙分解やマッピングも主要には文を最大の単位としてきた。なるほど言語活動には文の繰り返しの側面がある。そうかといっても、文は言語活動のごく一部にすぎない。分析対象を文に限定することの欠陥は統語論以上に意味論において重大である。言語活動において談話を構成する一連の文はそれぞれ類似の統語構造をなしているが、話し手の伝える意図や意味が文で完結することはまれである。通例一連の文の集合によって伝達される。意味分析を進めるためには文を超える談話を対象にせざるをえない理由がここにある。

疑問をもちながらも文を最大の分析単位としてきた理由は他にもある。多様な現象を説明するためには、個別の現象をいちいち分析しても多様な結果が生まれるだけである。多様な現象の説明は対象を限定し、厳密な方法により基本モデルを構築することによりはじめて可能であるとする考えである。これは、§2 でみたように、論理学が採ってきた手法と同類のものである。確かにこれは複雑な要因からなる現象を扱う1つの手法である。しかし文を対象にする語彙分解から一連の文の集合である談話の意味や言語が発せられる文脈情報を期待することはできない。マッピングも極めて限られたものになる。例えば(25a) は文の意味と形式に限られ、談話の意味は対象外となる。(25e) からみると、文を最大の単位とするマッピングは極めて断片的なものであり、言語と思考・

文化の関係について全体像をゆがめることにもなりかねない。これまでの分析は文を最大の単位としたことによりあまりにも多くのものを無視してきた。言語の基本モデルを構築するにしても、それは分析対象を拡大したあとではじめてより確かなものになるであろう。

第2の限界は語彙分析が抱えている固有の問題点である。マッピングは語彙分解より遅れて進展しており、現在進行中であり、その問題点は第1の限界を克服する過程で生じると予想される。ここでは語彙分解の問題点のみ考察する。

語彙分解は生成意味論以降 Rappaport-Levin (1998) に至るまで一貫して英語を対象に考察し、英語の達成動詞に CAUSE の意味元素を付与している。CAUSE を付与される使役構文の動詞は kill, break などの語彙的使役動詞 (lexical causative), generalize, randomize などの派生使役動詞 (derived causative), cause, make などの迂言的使役動詞 (periphrastic causative) の3種に分類される。いずれの動詞も意味元素の CAUSE を含むだけに「使役」に関してはほぼ同義であることが前提とされている。さらに語彙分解の初期の生成意味論やモンタギュー文法では使役構文と by 句の間に対応関係や派生関係を見出そうとした。

- (29) a. He made the metal flat by hammering it.
 b. He flattened the metal by hammering it.
 c. He hammered the metal flat. ---McCawley (1971)

- (30) a. John awakened Mary by shouting.
 b. John's shouting awakened Mary. ---Dowty (1979:227)

(29a,b) の by 句は (29c) の語彙的使役動詞に含意され、(30a) の by 句は (30b) の主語に置き換えられている。少数の意味素性または原則で多様な言語現象が説明できる分析はスマートにみえる。しかし重要なことは言語現象を遺漏なく説明できるか否かである。英語の cause には強制的な使役や容認の使役などさまざまな種類があり、語彙的使役動詞の達成動詞と迂言的使役動詞が同義でないことは古くから指摘されている。

- (31) a. A change in molecular structure caused the window to break.
 (分子構造の変化により窓がこわれた)
 b.*A change in molecular structure broke the window. ---Hall (1965:28)

- (32) a. The low air pressure caused the water to boil.
 (気圧が低いため水が沸騰した)
 b.*The low air pressure boiled the water. ---Hall (1965:28)

- (33) a. John caused Bill to die on Sunday by stabbing him on Saturday.
 (ジョンが土曜日にビルを刺したのが原因でビルは日曜日に死んだ)
 b.*John killed Bill on Sunday by stabbing him on Saturday.---Shibatani (1976)

(31)(32) は迂言的使役動詞がそのまま語彙的使役動詞に置き換えられないことを示し、(33) は by 句との共起が迂言的使役動詞と語彙的使役動詞で異なることを示している。いずれの場合にも形式が違えば意味や用法も違ってくる。

語彙分解は語句を意味元素に還元することにより言語の普遍性を求めているが、皮肉なことに英語の特定の使役構文を説明することができても他言語に適用できない場合が多い。使役構文のうち (29a,c) のような結果構文は英語などの衛星フレーム言語にはみられるが、日本語・フランス語などの動詞フレーム言語には通用しない(詳しくは児玉 2002a:74-6参照)。

疑問がありながらも CAUSE を受け入れ、そこから生じる問題点は別の制約により処理されている。ここには少数の要素へ還元化することのむずかしさがある。少数の要素に還元して原則や規則を設ける場合、他の要因による現象はその原則や規則と相容れない、または相反することになる。複数の原則や規則が競合したり相反する場合どのように扱うべきか未解決の問題があるが、この点については § 5.3 で考察する。

4 . 語用論

4.1. 発話 (utterance) の意味

20世紀の多くの言語学研究は、前節でみたように、文を最大の分析単位とし、ラングや言語知識を言語対象とした。その結果、一方ではラングとしての語・句・文の意味を対象に意味論が展開したが、他方ではそれを補うものとして、あるいはそれと対立するものとして言語が発せられる文脈情報を含めて発話を分析対象にした語用論が20世紀の後半期に盛んになった。意味論と語用論はいずれも言語表現を対象にしており、当然のことながら両者には重複するところも多い。重要なことは日常の言語活動である発話にどのような意味が込められているかということになる。

発話には次のような意味が込められていると考えられる。

(34) a. ラングとしての語・句・節・文の意味

b. 発話の場面が提供する情報

- i) 直示表現 (deictic expression) や臨場などにより発話の指示対象を特定化する場面情報：対話者が誰か、場所・時間・事物の特定化など
- ii) 発話に直接・間接的に影響を与える場面情報：対話者の人間関係、場面の雰囲気 (堅苦しさ・なごやかさなど)、場面での出来事など

c. 話し手の意図・主張

d. 話し手の世界についての知識・価値観

(34b-d) が一般に文脈情報と呼ばれるものである。(34a) の意味は発話では (34b-d) の文脈情報により多様に増幅されることもあれば、逆に特定の意味に限定されることもある。ラングとパロール、あるいは言語知識と言語運用は本来対立するものではない。(34a) のラングが (34b-d) の文脈情報により増幅したり限定されるものがパロールである。つまりラングは文脈情報という因子により変化するパロールの適用範囲を示す指標である。

(35) a. Jack is old enough.

b. I will go there with you tomorrow night.

(36) a. 店の客：灰皿ありますか。

店員：今ありませんが、ご入用ですか。

b. 客間の客：灰皿ありますか。

主人：*今ありませんが、ご入用ですか。

(37) John's friends asked their wives to visit one another.

a. ジョンの友人たちは妻にお互いに行き来するように頼んだ。

b. ジョンの友人たちは自分の妻たちに自分の他の妻ともお互いに行き来するよう頼んだ。

(35a) はジャックが誰を指すかにより, 学校へ行ける幼い子どもにも, 結婚を考えている青年にも, 仕事から引退する老人にもいえる。(35b) の I, you, there, tomorrow night の指示対象は発話時に応じて自由に変わりうる。(36) で疑問文を発した話し手の意図は (a) が質問で (b) が依頼である。(36b) の客の意図はタバコを吸いたいのので灰皿を出していただけないかと依頼しているが, 主人がその意図を誤解しているため不適格な応答となる。(37) の英語はラングの意味では (a)(b) 2通りの意味を有するが, (34d) と関連して一夫一婦制の社会では通例 (a) に解釈され, 一夫多妻の社会では (b) に解釈される。

発話の意味を生成解釈する際, 日常の言語活動ではラングとしての意味と文脈情報を結びつけるために多くの推論が働いている。

(38) a. John is a bachelor.

b.??The Pope is a bachelor.

(39) = (8) a. John is a politician and he is honest.

b. John is a politician but he is honest.

(40) A: What would you like for your birthday?

B1: I need a camera.

B2: Well, my camera's broken. ---Green (1996:94)

(41) a. 先生が来た。vs 先生がおいでになった。

b. 太郎が来た。vs * 太郎がおいでになった。

上例の推論には (34d) の世界についての知識が関与しているが, 世界についての知識も多様な種類からなる。(38) において bachelor はラングとして「未婚の男性」を示すが「結婚適齢期で結婚の意志をもつこと」も含意しており, (38a,b) の (不) 適格性の判断には John と Pope の指示対象についての知識が必要である。(39a,b) の含意の違いは「政治家」と「正直」の結びつきにおける価値観の違いでもある。(40) で誕生日の贈り物に何がよいかと聞かれて直接答えるのは社会的にタブー視されると考えれば B 2 のように答える。ごく親しい間柄では B 1 も可能である。文脈情報として (34bii) における対話者の人間関係により答えも変わってくる。(41) も同様で敬語表現(お...になる)は話し手と主語との対人関係により (不) 適格性が違って来る。

次例の発話では世界についての知識の一貫性または関連性が推論に関わっている。

(42) a. I love to collect classic automobiles. My favorite car is my 1899 Duryea.

b. I love to collect classic automobiles. *My favorite car is my 1977 Toyota.

---Mann-Thompson (1987)

(43) A: I am out of petrol. (ガソリンが切れた)

B: There is a garage round the corner. (角を曲がったところにガソリンスタンドがあるよ)

---Grice (1975)

(44) A: What time is it?

B1: You've dropped your wallet.

B2:*By the way you've dropped your wallet.

---Wilson (1998)

(42b) の不適格性はクラシックカーと1977年型トヨタとが矛盾し一貫性に欠けるためである。(43) ではガス欠で動かなくなった車のそばに立っているAにBが助言している。一見Aの発話と無関係なことを言っているかにみえるが, Bの真意は「角を曲がったところにガソリンスタンドが開いて

おり、ガソリンを入手できるよ」と推論される。もしBがgarageに代えてgrocer's(食料雑貨店)とでも言えば、関連性に欠け不適格となる。(44)はAが時間を聞いたのに対して、B1はその質問と無関係に「財布が落ちましたよ」と注意している。ここには(34bii)が働いている。当面の話題よりその場で緊急性があり、より重要なことには誰もが注目するという暗黙の人間の反応に基づいている。これに対してB2は当面の話題を変える合図として談話標識のby the wayを用いているが、(44)のように緊急性を要する場面では談話標識の存在そのものが不適格である。のんびりと話題を変える合図をする場合には、まずそれまでの質問に答える必要がある。

世界についての知識は(38)(39)(42)のように命題に一貫性をもたせるために論理的に要請される知識、(40)(41)のように社会における対人関係から派生した知識、(43)(44)のように推論を可能にする人間の認知能力に由来する知識など、多様に分かれる。話し手が恒常的にもつこのような知識(34d)とともに、言語表現およびそれから発せられる場面の意味(34a-c)が交錯しながら発話を形成している。

語用論はラングや言語知識だけでなく言語が発せられる文脈情報を含む発話を分析する。分析対象となる発話はしばしば隣接する複数の文からなる。ここではラングとパロール、言語知識と言語運用の区分にこだわらないで、意味論よりも分析対象を拡大している。言語がどのような場面でどのように使用されているか、話し手は何を伝えようとしているのか、聞き手との間にどのような人間関係を形成しようとしているのか、言語使用と社会の経験や人間の認知能力との間にどのような関係があるのかなどに接近しようとしてきた。その点、語用論は意味論の壁を破り、言語活動や言語表現の全体像に近づく突破口を開こうとしている。

4.2. その限界

語用論はラングとしての文を最大の単位とする意味論より二重の面で分析対象を拡大している。文を超える発話を分析するとともに、文脈情報を含む言内外の意味を扱っているためである。そのような利点をもつとはいえ、これまでの語用論にも限界がある。

第1に、文を超える発話を対象にしながらも、多くの語用論が対象とする発話はせいぜい隣接する2・3の文からなるものに限られる。隣接する文間の文脈やつながりは捉えられるにしても談話(またはテキスト)全体が対象とされるわけではない。したがって、隣接する2・3の文をつなぐ文脈は分析されるが、その談話全体が生まれた社会や時代についての文脈情報は扱われない。換言すれば、局所的な文脈(local context)は扱われても全体的な文脈(global context)は扱われない。同じように、意味の一貫性にしても2・3の文をつなぐ原理は明らかにされるが談話全体の一貫性が追究されるわけではない。つまり局所的一貫性(local coherence)は扱われても全体的一貫性(global coherence)は扱われない。その結果、(34)の文脈情報のうち(34c)で話し手の意図は部分的に分析されても談話全体における話し手の主張の内容が論じられることはない。また(34d)で話し手の世界についての知識が散発的に言及されても談話全体における話し手の価値観を論じることは避けられている。これは用例(16)(17)で命題態度や価値観に關与する平叙文に対して真偽の判断を停止した論理学と同じ手法である。話し手が世界について何を主張し、どのような価値観を提示するかは、談話や言説の中心的課題であり人文社会科学の中核をなすものであるが、それを分析対象から排除することは意味分析にとって大きなマイナスである。誤解を避けるため付言しておくが、意味分析において話し手の主張や価値観を対象にすべきということは、談話や言説の分析者が常に

自分の主張や価値観を示すべきというのではない。分析者自身何らかの主張や価値観をもつことが大事であるが、分析者にとってより重要なことは談話や言説がその話し手のどのような主張や価値観に基づいているかを明らかにすることである。

第2に、これまで統語論は一方で諸言語の普遍性を追究し、他方で諸言語の違いを基礎に言語類型を明らかにしてきたが、意味論・語用論では諸言語の構造上の異同が必ずしも十分追究されていない。語用論で例えばポライトネスの表現法が言語により異なることがときに論じられるが、そのような意味構造上の分析を個別の表現法の記述にとどめないで、その言語構造全体の中に位置づけ、「言説の秩序」(order of discourse)にも届くようにすることが望まれる。「言説の秩序」とは特定の言語社会で時間をかけて形成される言語社会固有の特徴や偏見を含む「スタイル」とも呼ばれるものである(「言説の秩序」について詳しくは児玉2003a,c参照)。

上記2つの限界は密接に関連したものである。そのような限界を打開する1つの試みとしてはDijkやFaircloughなどが推進している批判的談話分析(critical discourse analysis:略してCDA)がある(CDAについて詳しくは児玉2003a参照)。ここでは談話全体を対象に支配・権力・ヘゲモニー・(不)平等・イデオロギーなどをキーワードにし、言語と社会の全面的な相互作用を論じている。意味分析が対象を拡大して言語活動の全体像に迫るためにはCDAのように談話全体を対象にする分析を蓄積していく必要がある。

5. 意味分析の課題

5.1. 対象とする意味レベルが異なる場合

§ 3.2と§ 4.2で指摘した意味論・語用論の限界を克服しようとする場合、意味分析の対象領域は広範なものとなる。分析対象の違いに応じて当然のことながら分析方法も違ってくる。以下、本節では3つの小節に分けて、発話の生成解釈過程でどのような意味がどのように処理されているかを探り、意味分析で考慮されるべき対象と方法についてその課題を指摘する。

まず分析対象とする意味レベルの違いから考察する。§ 3.1でみたように、言語は形式上音素・形態素・語・句・節・文などの多様なレベルからなるが、意味レベルもそれに対応して形態素・語・句・節・文・談話(全体)などからなる。例えば語そのものの意味、語と語が結合して生成される句・節の意味、複数の文のつながりによる談話(全体)の意味はそれぞれ異なる方法で規定される必要がある。談話全体で主張したい主題(main idea)がいったん決まると、発話の展開に応じてフレームや話題(topic)は変わっていく。その変化には用例(38)-(44)でみたように一貫性(coherence)や関連性(relevance)が関与し、一貫性や関連性は用例(28a,b)のデフォルト解釈の適否も決定する(主題と話題の関係、一貫性と関連性については児玉2003b参照)。

言語は本来意味と形式の結合したものであり、意味と形式は表裏一体の関係にあり、意味を分析するとしても絶えず形式との関係が問われ、広義には(25a)のマッピングが要請される。例えば選択制限や(21)-(24)でみた語彙分解は意味と形式との対応関係を考察している。言語現象として意味と形式が渾然一体に結合しているとはいえ、両者が区別できないわけではない。むしろ分析においては意味と形式を区別し、差異対立に基づきそれぞれの領域を構成している要素または単位を見出してはじめて記号としての言語構造を明らかにすることができる。意味分析としては意味上

horseとcow,あるいは用例(31)-(33)の(a)と(b)などを区別する差異対立を明らかにすることが最も重要な課題である。最終的にはその成果が語彙分解での問題点も解決していく。

意味レベルの違いとしては言語普遍的な現象と言語固有の現象もある。認知能力や言語能力が種としての人間に生得的に付与されたものであるとすれば、言語構造の多様性も無限の広がりをもつものではなく、生得的に付与された能力の範囲内で生じるが、社会での生後の経験により能力の開発に大きな違いが出る。言語表現として普遍的なものと言語固有なものが生まれるのもこのためである。例えばマッピングが関与する(25c, d)では言語表現の意味が言語化される前の概念や認知過程と密接に関連するため、多くの普遍性がみられる。しかし(25e)では意味が社会の価値観などと関連するため言語共同体固有の言説の秩序を生むことにもなる。発話に込められている(34)の意味についても同様である。先ほど§4.2では文脈と一貫性に局所的なものと全体的なものがあったが、個別言語において局所的なものが一致しても全体的な文脈や一貫性が異なる場合がある。後者には社会の文化がより強く反映しているためである。

言語によっては多様な概念のうちいずれを重視するかによって言語化が異なり、言語形式に込められている意味が違ってくる。例えばin, out, up, downなどの経路概念が英語・ドイツ語のような衛星フレーム言語では閉じた体系の副詞や前置詞によって表されるのに対して、日本語・朝鮮語のような動詞フレーム言語では開いた体系の動詞によって表される。

- (45) a. go up vs 上がって行く / eat up vs 食べ尽くす
 b. go down vs 下がって行く / pull down vs 引き降ろす
 c. go in vs 入って行く / run in vs 駆け込む
 d. go out vs 出て行く / take out vs 取り出す

幼児がいずれの型を習得するにしてもその習得時期に大きな違いはない(Bowerman 1996参照)。いずれも言語化される直前の概念や認知過程に密接に関連し、生得性の強い言語能力の一環として習得されるためである。

日英語の違いが上記の(45)のほかにもどのような現象に現れているかをもう少しみてみよう。例えば自称詞・対称詞は英語ではI, youと単純であるが、日本語では「私・ボク・オレ」に限らない。話し相手によっては自称詞が「おじさん・おばさん・お姉さん」になったり、対称詞が「ボク・お嬢さん・おじさん」になったりする。言語構造として英語には丁寧な表現があるが、日本語のような尊敬語はない(用例(41)参照)。英語がthis that, here thereの2分法であるのに対して日本語が「こ・そ・あ」の3分法をとるのも、言及する対象が話し手・聞き手の縄張り内にあるか否かに配慮しているためである。さらに英語は名詞の数として単複を明示し、形容詞・副詞に比較変化形を有し、文が通例主語を伴うなど、日本語にない特質をもっている。こうした日英語の違いの背後にはどのような原理が働いているのであろうか。選択体系機能言語学は意味体系が文脈の中ではたず機能を観念形成機能・対人関係機能・テキスト形成機能の3種に分類しているが(詳しくは児玉1991:135, 1998:226参照), 3機能のうち一般に英語が観念形成機能を重視するのに対して、日本語は対人関係機能を重視する。確かに英語は現実世界を客観的に記述する命題内容に詳しく、日本語はむしろ命題に対する話し手の判断や話し手と聞き手の対人関係に詳しい。英語の「言説の秩序」はともかく、日本語の「言説の秩序」としては結婚披露宴での新郎新婦は誰もが秀才・才媛になり、就職の推薦状では好ましくない人物でもあいまいな賛辞で飾られることがある。たとえ「うそ」を言ってGrice(1975)の「質の公理」を犠牲にしても、対人関係や相手の立場を傷つけないよ

うに配慮している（「質の公理」への違反については児玉 2003e 参照）。こうした言語固有の特質は同時に習得されるわけではない。語彙・文構造・言説の秩序の順に遅くなる。この順序は言語社会の慣習や文化への浸透度に比例している。

意味がどのような言語形式と結合するかにより意味レベルは異なり、通例分析方法も違ってくる。意味レベルの違いが諸言語にどのように実現され、いつの時期に習得され、どのような原理が個別言語の特質を貫いているのかを明らかにすることは言語分析の中心課題である。ここには生得的な言語能力や認知能力、生後の経験など、言語を形成するすべての要素が関与しているためである。

5.2. マッピングする場合

§ 3.1 の (25) では言語形式とその機能との関係をマッピングするものとして (a) - (e) の 5 つの分野を示した。言語そのものを対象とする言語学は、理論により重点の違いはあるがこれまで多かれ少なかれ (25a-d) を扱ってきた。言語学がその対象を拡大するとすれば、(25e) の「言語と思考・文化」も意味分析の一環として含むことになる。重要なことは (25a-e) のマッピングをどのように扱うかである。

§ 4.1 では発話に込められている意味を (34) で示した。この (34) の意味は (25a-e) のマッピング分野で究明されるが、マッピングの方法は分析対象の意味により違ってくる。例えば (34a, b) は従来の意味論や語用論の中心課題であり、言語形式が表す意味と指示対象のマッピングが進められてきた。これに対して (34c, d) は (34a, b) に比べ、明示性に欠け、意味上あいまいなところもある。同じ (34c) の「話し手の意図・主張」にしても、用例 (36a, b) での意図の違いは通例発話の場面から区別されるが、話し手の主張である談話全体の一貫性については聞き手の判断がしばしば異なる。全体的一貫性の判断では話し手が現実世界について想定していることが適切に談話に表現されているか否かが問われる。Fillmore-Atkins (1992) は用例 (26) との関連で商取引がそのフレームを形成する要素を中心に記述されることを示したが、それと同じように、全体的一貫性は談話全体の目標である主題がそのフレームを形成する談話内のキーワードや各パラグラフ内の話題といかに有機的につながっているかにかかっている。さらに全体的一貫性の妥当性は全体的文脈との関連でも判断される。そのため聞き手は世界について自分が抱いている想定を絶えず話し手の想定と対決させており、聞き手自身、自己の世界観をもっていることが要請される。世界についての想定はマッピングの対象である (25d, e) の「言語表現と世界」「言語と思考・文化」や発話に込められている意味を形成する (34d) の「世界についての知識・価値観」と密接に結合している。全体的一貫性を対象にすれば、価値観などを通じて全体的文脈である社会構造をも世界の知識として考察せざるをえなくなる。

局所的文脈や局所的一貫性を積み重ねたからといって、必ずしも全体的文脈や全体的一貫性が成り立つわけではない。全体は部分の総和ではなく、全体として独自の特質を有している。談話の意味分析において局所的な文脈や局所的一貫性は談話の構成要素として重要である。しかしそれがすべてではない。全体的文脈や全体的一貫性を常に考慮する必要がある。そこで談話分析には大きく 2 つの方法がありうる。1 つは帰納的に談話の局所的部分を積み重ねて全体に迫る「積み上げ方式」(bottom-up approach) であり、あと 1 つは演繹的に全体の上位原則から部分の詳細が導かれる「上意下達方式」(top-down approach) である。もちろん両者の中間的な分析法もありうる。重要なことは、いずれの方式をとるにしても、全体と部分の整合性をいかにとるのかということになる。広

とを論じている。例えば人にA地点からB地点に行くよう依頼すると、何の指示を与えなくても通例最短の近道（または時間）をとってB地点に行く。これは言語においても同様である。多様な意味が言語化されているが、話し手としてはことばを用いる労力を節約して1語で多様な意味の用を足したいと思ひ、逆に聞き手としてはことばを解釈する労力を節約してそれぞれの語に1つの意味をもたせ、意味の違いに応じて異なる語を用いてほしいと思っているという。この最小労力の原則は話し手の側と聞き手の側で反対に働いている。その後Grice (1975) は発話の生成解釈において会話の協調原則と4つの公理を提案したが、その1つである量の公理は(1)「必要なだけの情報を与えよ」と(2)「必要以上の情報を与えるな」の2つに下位区分されている。これは一見矛盾した公理に見えるが、(1)が聞き手の論理であり、(2)が話し手の論理である((1)(2)が適用される例について詳しくは児玉2003e参照)。

最小労力の原則が働いている他の現象をみてみよう。(50)の意味特性軸は日本語と日本文化の一般的な特徴を示し、§5.1では「一般に英語が言語の観念形成機能を重視するのに対して日本語は対人関係機能を重視する」と述べた。しかし現実にはこの一般的傾向に反する現象もみられる。

(51) a. Frankly, I can't help you.

b. i) *率直に、手伝えません。

ii) 率直に言って、手伝えません。

(52) a. He's coming toward us.

b. i) こっちへ来るよ。 (告知)

ii) こっちへ来るぞ。 (警告)

iii) こっちへ来るね。 (確認)

iv) こっちへ来るさ。 (予想)

v) こっちへ来るわよ。(女性の告知) 内田(2003)

(53) a. John cut his finger. The knife slipped.

ジョンは指を切った。ナイフが *すべった。 / すべったのだ。

b. The knife slipped. John cut his finger. ---Blakemore (1992:135)

ナイフが *すべった。 / すべったので、ジョンは指を切った。

英語は必ずしも常に観念形成機能を重視し、心的表示の概念を詳しく言語化しているわけではない。

(51a)のFranklyはFrankly speakingの意味で命題に対する話し手の態度を含意しているが、日本語では命題態度は(51bii)の下線部のように明確に言語化され、様態副詞の「率直に」(51bi)と区別される。(52a)の英語は日本語では(52b)のように多様に訳され、終助詞が()内の言語行為を明示している。(53a,b)の英語は2文からなり、2文の語順を逆転してもほぼ同義である。これに対して日本語では普通下線部のような形で文間の関係を明示する。内田(2002)が指摘するように、英語が話し手の解釈(つまり言外の高次表意)を副詞語句や文間の関係に委ね、聞き手にその解釈を推論させるのに対して、日本語は聞き手の労力を少なくするために話し手の解釈を何らかの形で言語化している(高次表意の類例については児玉2002a:163-4参照)。また英語の各語彙がそれに対応する日本語よりはるかに多くの語義を有しているのも同じ理由による(例えばstationと「駅」、runと「走る」については児玉2002a:102参照)。

上例では英語が多くの意味解釈を同じ言語形式に託しているのに対して、日本語はそれぞれ異なる形式で言語表現している。いずれもZipfの言う最小労力の原則に従っているが、両者の違いは

英語が話し手の論理に従った言語であるのに対して日本語が聞き手の論理を重んじる言語であることに由来する。話し手重視か聞き手重視かの違いは、視点の当て方こそ異なるが、(50)の対象依存性の(-)か(+)かにほぼ対応する。英語が話し手重視で対象依存性の弱い言語であるのに対して、日本語はその対極にある。(51)-(53)の日本語は話し手の解釈を詳述し、観念形成機能を重視しているが、これも究極的にはすべて聞き手に配慮した結果である。その点、英語は必ずしも常に観念形成機能を重視するわけではない。一般に、英語は客観的に現実の出来事や事柄を記述する命題において観念形成機能を重視するが、その命題に対する話し手の捉え方や話し手・聞き手の対人関係機能においては必ずしも詳しく心的態度を記述するものではない。これは対象依存性特性軸に鈍感(-)なことによる。いずれにしても、選択体系機能言語学のいう観念形成機能と対人関係機能は両者が交錯する領域においては、その適用範囲を精査する必要がある。

一見対立しているかにみえる上記のような現象はともかく、Zipfの最小労力の原則は1990年代後の生成文法のミニマリズムにもつながる。そこでは文法をできるだけ簡単にし、子どもの言語習得の負担をも最小限にするため修正を繰り返している。ただしここで忘れてならないのは、われわれが必ずしも常に最小労力の原則に従って言語活動をしていない点である。用例(40)(41a)のような控え目表現や敬語表現では最小労力の原則にそって直接答えたり記述するのではなく、有標構造として間接表現や迂言表現をとっている。ここでは最小労力の原則を破る犠牲を払ってでも、よりよい対人関係を築こうとしている。用例(51)-(53)も表面的には言語類型としての言語パターンが競合しているが、背後では対人関係機能が強く働いている。最小労力の原則との関連で競合する原則や規則のうちいずれを重視するかは、対人関係を含む非言語的文脈によって違ってくる場合が多い。

次例では数(number)において意味と形式の規則が競合している。

(54) a. A lot of people were/*was there.

b. Three pints of beer were/was spilled.

c. A bowl of apples *were/was brought in.

(55) a. The family are all early risers.

b. Economics is the oldest of social sciences.

c. What follows from this are his arguments for dependency grammar.

(これから出てくるのは依存文法を支持する彼の論拠である)

(54a)のlotはa lot ofと慣用句化してpeopleの修飾語の一部となり、(54c)のbowlは主語の主要語であり、(54b)のpintsは(54a,c)の中間である。be動詞の数の違いは名詞のlot, pints, bowlが意味・統語上主語になりうるか否かの違いによる。(55a,b)の述語の数は主語の形式よりむしろ意味に基づいている。(55c)のWhatは無標構文では従節に見られるように単数扱いであるが、述語がbe動詞をとる場合は主節にみられるようにbe動詞のあとの名詞の数に呼応する。結果的にWhatは従節で単数、主節で複数という矛盾した役割を演じている。

次例はアスペクトと関連し、(不)適格性の判断が人により異なり、そこで働いている規則にも不明なところがある不安定構文である。

(56) a. John ran home for an hour.

(ジョンは走って家に帰り1時間いた)

b. (??) John ran home for one day.

c. (*?) John arrived for ten days.

(57) a. He became angry for a moment / a few minutes.

b. *He became angry all day long / for a long time.

(58) a. 太郎は1週間東京へ行った。vs ?太郎は13日間東京へ行った。

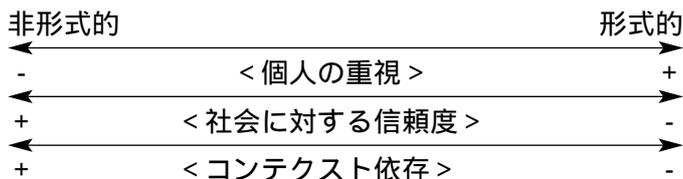
b. ?太郎は1週間東京へ来た。vs *太郎は13日間東京へ来た。

c. 船は1時間寄港した。vs ?船は1時間帰港した。vs ??船は1時間出港した。

(56) の for 句は期間を表し，達成動詞や到達動詞の行為後の状態を修飾している。達成動詞や到達動詞は本来 for 句と相容れないが，その共起を可とする者もある。(57) は副詞語句の期間の長短により適否の判断が分かれている(詳しくは児玉2002a:41,77参照)。(58) の適否の判断は筆者のものである。(58a) は(56) の英語に似ている。しかし(58a,b) の「来た」と「行った」や(58c) の「寄港した」「帰港した」「出港した」は異なるふるまいをする。Vendler (1967) に始まる行為・状態・到達・達成のアスペクトには統語上多くの違いがみられ(動詞の特質として例えば副詞語句との共起や進行形・命令文の可否など)，同時に例外もあり一筋縄でいかないことは Dowty (1979:51-71) が詳しく論じている。(56) - (58) では動詞のアスペクトそのものがその適用に柔軟性をもち，動詞個々の特質，副詞語句の示す期間概念，動詞の頻度，現実世界の出来事の認識などが関与していると考えられるが，アスペクト上動詞をどのように規定すべきか今のところ筆者には不明である。

§ 4.1 の(34d) では発話に込められている意味として話し手の価値観をあげている。通例価値観は複合的な特質からなる。Parkinson-Hill (1994) によると，日米の契約の概念や慣行の違いは文化の違いでもある。個人を重視し，社会に対する信頼度が低く，ことば以外のコンテキストに依存する度合いが低い文化では，契約の締結方法や契約不履行の処理方法が形式的となり，逆に集団を重視し，社会に対する信頼度が高く，コンテキスト依存度の高い文化では契約が非形式的になるといふ。契約行為の違いは § 5.2 で導入した意味特性軸で次のように表すことができる。

(59) 契約行為



一般にアメリカが(59)の右辺に，日本が左辺に位置する。そのほか，意味[文化]特性軸により複合的な特質からなる現象を分析したものとして，例えば「国益」，日本語の「かわいい」については児玉(1998:183-5)，「文構造と談話構造」の違いについては児玉(2003b)を参照されたい。

意味分析における上記3つの課題は相互に密接に関連している。言語が多様な意味レベルからなり，さらに多様な機能を有するとすれば，言語理論としては多様な言語形式レベルと多様な意味レベルや諸機能とをマッピングさせる原則や規則が必要となる。ここでは当然のことながら複数の規則が競合する。特定の規則から言語構造をみた場合，言語形式と意味を含む諸機能との間には1対1の対応関係を期待できず，多くのミスマッチがみられる。これは(54) - (58) からもうかがえるように，言語構造が多様な規則からなるため当然のことである。言語構造に不整合や非対称性をなすミスマッチがいかに多いかについては Francis-Michaelis (2003) を参照されたい。言語が歴史的に変化する源泉はこのミスマッチにある。つまり競合する複数の規則のうちいずれの規則が優位

になるかによりミスマッチの内容が変化し、やがては言語構造が変化していく。ミスマッチがどのような規則に由来するかを明らかにすることが言語分析に要請されており、その要請に応えるためには競合する規則間の関係を正確に捉える必要がある。

あらゆる記号の意味分析は広義の意味と形式とのマッピングである。本論は「言語が形式と意味の結合したものである」という前提から出発したが、意味や形式そのものが多様なものからなるだけに、意味分析といっても対象によってその内容も異なる。意味分析を言語分析の中心に位置づけた場合、言語分析の妥当性は最終的には意味と言語形式との関係を説明する経験的証拠の有無によって決定される。他方、意味分析が(25a,b)の分野にそって言語化された「意味」と言語化される前の「概念」との関係に焦点を当てた場合、「意味」と言語形式とのつながりを無視するわけではないが、その分析は認知心理学と結合する。逆に意味の対象を発話に込められた(34c,d)の「主張」や「価値観」に拡大し、言語形式をその背後にある「世界」や「思考・文化」と関連づけた場合、意味分析は文化論や思想史と結合する。いずれの分野も意味のレベルこそ異なるが、同じ意味に関与し密接にからまっている。どのような意味分析にしろ、多様な対象と方法からなるだけに、他の分野とのつながりを自覚し、他の分野にも届くようなものであることが望まれる。

引用文献

- Allwood, J., L-G. Andersson and Ö. Dahl. 1977. *Logic in Linguistics*. Cambridge University Press.
- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Blackwell.
- Bloomfield, L. 1933. *Language*. Allen & Unwin.
- Bowerman, M. 1996. 'The origin of children's spatial semantic categories: cognitive vs linguistic determinants.' In J.J. Gumperz and S.C. Levinson (eds) (1996) *Rethinking Linguistic Relativity* 475-511. Cambridge University Press.
- Chomsky, N. 1957. *Syntactic Structures*. Mouton.
- Dowty, D.R. 1979. *Word Meaning and Montague Grammar*. D.Reidel.
- Fillmore, C.J. and B.T. Atkins. 1992. 'Toward a frame-based lexicon: the semantics of RISK and its neighbors.' In A. Lehrer and E. Kittay (eds) *Frames, Fields, and Contrasts* 75-102. Erlbaum Association.
- Francis, E.J. and L.A. Michaelis. 2003. *Mismatch: Form-Function Incongruity and the Architecture of Grammar*. CSLI
- Frege, G. 1892. 'On sense and reference.' In M. Black and P.T. Geach (eds) (1952) *Translations from Philosophical Writings of Gottlob Frege*. Philosophical Library. Also in Zabeech et al (1974) 117-40.
- Green, G.M. 1996. *Pragmatics and Natural Language Understanding* (2nd edition). Lawrence, Erlbaum Associates.
- Grice, H.P. 1975. 'Logic and conversation.' In P. Cole and J.L. Morgan (eds) *Syntax and Semantics 3: Speech Act* 41-58. Academic Press.
- Hall, B. 1965. *Subject and Object in English*. MIT doctoral dissertation.
- Jackendoff, R. 1990. *Semantic Structures*. MIT Press.
- Kehrer, A. 2002. *Coherence, Reference, and the Theory of Grammar*. CSLI.
- 児玉徳美. 1991. 『言語のしくみ 意味と形の統合』大修館書店.
- , 1998. 『言語理論と言語論 ことばに埋め込まれているもの』くろしお出版.

- . 2001. 「前提」小泉保（編）『入門語用論研究 理論と応用』64-80. 研究社.
- . 2002a. 『意味論の対象と方法』くろしお出版.
- . 2002b. 「前提・推意の取り消し可能性について」『立命館言語文化研究』14.3:89-103.
- . 2003a. 「批判的談話分析（CDA）：言語と社会との関係を問う」『立命館英米文学』12:1-18.
- . 2003b. 「文構造と談話構造」『六甲英語学研究』6:1-23.
- . 2003c. 「ことばをめぐる言説 日本語ブームと英語第2公用語化論の奇妙な関係」『立命館言語文化研究』15.1:105-21.
- . 2003d. 「意味と形式」『立命館文学』580:17-34.
- . 2003e. 「GCIをめくって 新Grice派と関連性理論の比較」『語用論研究』第5号.
- Löbner, S. 2002. *Understanding Semantics*. OUP.
- Mann, W.C. and S.Thompson. 1987. 'Relational propositions in discourse.' *Discourse Processes* 9:57-90.
- McCawley, J.D. 1971. 'Pre-lexical syntax.' In O'Brien (ed) *Report of 22nd Roundtable Meeting on Linguistics and Language Studies*. Georgetown University Press.
- Parkinson, M. and B.Hill. (香取真理子訳) 1994. 「契約の概念と慣行」本名信行ほか（編）『異文化理解とコミュニケーション2』219-42. 三修社.
- Rappaport, H.M. and B.Levin. 1998. 'Building verb meanings.' In M.Butt and W. Geuder (eds) *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors* 97-134. CSLI.
- Saussure, F.de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Payot.
- Shibatani, M. 1976. "The grammar of causative constructions: a conspectus." In M. Shibatani (ed) *Syntax and Semantics 6: The Grammar of Causative Constructions* 1-42. Academic Press.
- Strawson, P.F. 1950. 'On referring.' *Mind* 59:320-44. Also in Zabeech et al (1974) 159-92.
- 内田聖二. 2002. 「高次表意からみた日英語比較への一視点」『人間文化研究年報』（奈良女子大学）17:7-18.
- Vendler, Z. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.
- Wilson, D. 1998. 'Discourse, coherence and relevance: a reply to Rachel Giora.' *Journal of Pragmatics* 29:57-74..
- Zabeech, F., E.D.Klemke, and A.Jacobson (eds) 1974. *Readings in Semantics*. University of Illinois Press.
- Ziph, G.K. 1949 (1965) *Human Behavior and the Principle of Least Effort*. Hafner.

（本学特任教授）